

ゾラの庭(中)文学の庭(4)

YAMASHITA, Makoto / 山下, 誠

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化. 論文編 / 異文化. 論文編

(巻 / Volume)

12

(開始ページ / Start Page)

159

(終了ページ / End Page)

175

(発行年 / Year)

2011-04-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007180>

ゾラの庭（中）

——文学の庭 IV——

Zola et les jardins

山下 誠
YAMASHITA Makoto

『プラッサンの征服』（1874）の庭

《地方都市プラッサンを王党派からナポレオン三世派へと奪還するために神父フォージャ神父が送り込まれてくる。フランソワ・ムーレの家に下宿したフォージャ神父は策略を弄し町を征服し、さらにはムーレの妻マルトの精神も支配する。除け者にされたムーレは狂人としてテュレットの精神病院に閉じ込められ、そのあげく本物の狂人となり病院から脱走、プラッサンに戻り、自分の家に放火する。彼はフォージャ神父たちを焼き殺し、自身も焼死する。マルトも同日母の家で神経の病が急激に悪化させた持病の肺結核のため死亡する。》

0.

『プラッサンの征服』は「ルーゴン＝マッカール叢書」の第4巻にあたり、1874年に刊行された。帝政政府から送り込まれた神父が巧妙にプラッサンの支配階級を籠絡し手中に収める経緯とルーゴン＝マ

ッカール家に潜む遺伝性の狂気がマルトに、ついでムーレに表れ、破局に追いやる過程とを2つの軸にこの物語は進行するのであるが、そのあまりに直線的な展開、類型的な人物像のせいか、叢書中においては他と比べると評価の低い作品である。

「庭」についても同様なことが言えるのかもしれない。この作品には複数の庭が現れ、征服の物語の展開において極めて重要な舞台となっている。しかし、のちに詳しく述べるように、このレベルにおいて作者が庭に与えた役割、意味はあからさまであり、誰しもが一読し了解できるものとして表れる。それゆえか、ゾラの庭をテーマとした研究書にこの『ブラッサンの征服』の庭は登場せず、この作品を対象とした研究においても庭が特段の位置を占めることはないに等しい。⁽¹⁾

確かに反教権主義、宗教と政治の癒着、そして遺伝的狂気というこの作品を牽引する主要テーマの展開との関係の中で見るならば、庭に与えられた意味は単純明快にすぎるともいえよう。しかし、この関係を捨象し、庭に据えた視点より物語を考察するならば、この作品における庭は別の姿を現す。それは物語の展開においてしかるべき役割を果たしつつ、一方で「もうひとつの物語」を形成し、「ルーゴン＝マッカル叢書」から後期の「三都市叢書」「四福音書」の諸作に至るまでゾラの世界全体をもっとも根幹において進展させるものが何かをわれわれに示すのである。

1. 1

本論では『ブラッサンの征服』の3つの主要な庭を取り上げる。⁽²⁾ 帝政派の大立者であるペキュール・デ・ソレが住む郡庁舎の庭、ブルジョアの共和派、フランソワ・ムーレ家の庭、そして王党派の精華であるラストワル裁判長の家の庭である。フォージャ神父のムーレ家下宿の話が一段落するやこれらの庭が詳細に紹介される。庭の紹介でも

っとも重要な点は個々の庭の形姿よりは、3つの庭の位置関係である。すなわち、3つの庭が上記の順に左から並んでいることである。ムーレ家の庭は郡庁舎の庭とラストワル家という対立する2つの大政治グループのリーダーの庭の間にある。そして3つの庭の外側にはシュヴィロット袋小路が走っている。袋小路側が観客席として、手前に小道があり、その向こうに3つの庭が仕切られてあり、さらにその奥に3つの家が並んでいる、そのような舞台装置を想像すればよい。この作品を劇化するならばこの舞台装置の1幕で可能であろう。物語のすべてはこれらの庭に反映し、展開の要所はそこで起こるからである。

それらの形姿そのものはのちに細述するムーレ家の庭を別にしてさほどの意味作用を発揮するものではない。王党派ラストワル家の庭は「もったいぶった」「小さな散歩道」「小さな円形花壇で仕切られた」「花ばかりの」「英国風」庭園で(929)、帝政派郡庁舎の庭は「中央に広い芝生」があり「高いマロニエの木」のせいで公園のようである(932)。ラストワルの庭は英国風と言いながら自然風景式というより整形式庭園を想像させる点で、また郡庁舎の庭は帝政が推進した「都市公園」⁽³⁾を連想させる点で、それぞれ党派とのつながりを象徴的に表しているといえる。

この2つの庭の姿形は変わることがない、一方、ムーレ家の庭は大きく姿を変える。ここでは物語の開始時における形姿を見ておこう。ラストワル家と郡庁舎の2つの庭、そしてテラスと袋小路に囲まれた庭はおそらく四角形であろう、それが「黄色い砂がまかれた」小径と「大きなつげの木」で4区画に分けられている。そして中央にはこの時点では水のない池がある。中央に生命の木、あるいは泉を持つ四分園、エデンの園に連なる西欧の庭の古典的な形にこの庭は袋小路の方に「あずまや」を、家のテラスの方に「温室」を付け加え、4区画中の3区画には野菜や果樹を植え、残るひとつだけに花を作っている。「ブルジョア的な手入れ」が行き届いた「田舎によくある古くからの

庭園」である(928)。冒頭における庭の姿は、フォージャ神父が破壊することになる引退したブルジョアとその家族のつつまじやかであるが穏やかで安定した世界を表している。この庭を見せられたフォージャ神父はこれを「小さな楽園」(928)と評し、これに対し、ムーレは、庭は「閉ざされた楽園です。悪魔の誘惑など物ともしません」(932)と言う。

1. 2

ムーレの閉ざされた小さな楽園はこの一種の悪魔祓いの言葉にもかかわらずフォージャ神父によって開かれ消滅する。しかし、悪魔の目的は楽園の支配、その破壊にあるのではない。ムーレの庭は別の目的のために道具として利用されるのである。

その目的、フォージャ神父の任務とは、王党派の国民議会議員を選んでしまったブラッサンの町を帝政派にとりもどすことである。彼はそのために帝政派の勢力を強化する、あるいは王党派を弱体化するという方法をとりはしない。彼の策略は両派の対立を超える力の誕生のなかで両派を和解させ、したがって独自の政治勢力としての力を削ぎ、超越的な力の導きにより町全体の候補を選ばせるというものである。対立の上に君臨する力がフォージャ神父であり、結果ブラッサンがパリに送る議員が実は帝政派であることは言うまでもない。そしてこの策略の遂行のためにフォージャ神父は両派の庭に挟まれたムーレの庭を利用するのである。より正確に言うと、その位置を利用する。

そのプロセスを簡単にたどっておこう。ムーレ家の3階に下宿したフォージャ神父はまず主婦マルトを影響下に置き、彼女に発案させた聖母慈善委員会の活動を通して上流婦人たちの、さらには町の婦女子の支持を獲得、同時に教会内の勢力も確立する。ついで若者クラブが設立され、青年たちが支配下に入る。この段階で庭が動き始める。ム

ーレの庭を散歩するフォージャ神父に帝政派のポルキエが隣の庭から声をかけ、これをきっかけにムーレの庭のシュヴィロット袋小路への扉が開かれる。袋小路で両派の男たちが出会い、さらに袋小路で行われたバドミントン試合がムーレの庭に両派社交界を導く。そしてついにムーレの庭は対立する政治グループが定期的に会する中立地帯となる。

フォージャ神父は「カインとアベルも和解し」(1062)、彼の意のままになる「私の楽園」(1062)を作り上げるために庭を利用するが、重要なのはそれが常に彼の積極的行為によってなされるのではないという点である。最初に庭ごしに声をかけるのはたまたまフォージャ神父の姿を見つけたポルキエであり、シュヴィロット袋小路への扉の錠をフォージャ神父がはずす状況を作るのもポルキエである。そして両社交界がムーレの庭で合体するきっかけはラストワル家の娘が袋小路でするバドミントンの試合中の偶然の事故である。すなわちフォージャ神父は獲物が巣の前を通るのを待つ捕食動物のようにムーレの庭を聖務日課書を手に「隣人たちの気を引き」「興味をそそる」(1051)ように散歩しつつ、両派を自らのテリトリーに引き込む機会が生じるのをじっと待ち、生じるやいなや確かにそれをつかむのである。そして出来上がったムーレの庭の社交界において彼は「可能な限りめだたず、ほとんど話さない」(1096)。

すなわちフォージャ神父は庭で策動する、庭を利用して行動するのではなく、庭がその位置に潜在的に持つ力、機能を発揮させるという意味で庭を利用するのである。対立する二項を仲介する中央という配置そのものは簡明で図式的であり、ことさらその働きを指摘するほどのものではなく、『プラッサンの征服』の三幅対の庭が研究者の関心をひかないのはその安易な構造のせいかもしれない。しかしゾラにおいて庭のこのような単純な配置と働き、あるいはその利用は物語進行上の便宜から偶然に生じるものではない。それは彼にとっては庭その

ものがこうした配置においてもっとも発揮されるべき力を本質的に持つ存在であるからである。

1. 3

すでに考察した『夢想』では、「マリー葉園」がフェリシアンとアンジェリックを、『愛の一ページ』ではドゥベルル家の庭が医師ドゥベルルとエレヌを結びつけた。前者においては庭が擬人化され、行為者・登場人物として2人の関係に働きかける様子も見た。すなわちゾラにあって庭は異質な世界を接触させ、交流させ、融合させる力を持つものなのである。⁽⁴⁾ これは『薔薇物語』にさかのぼる男女の逢瀬の場所としての庭という西欧の伝統の流れをくむものであることは確かであるが、そこにとどまるものではない。なぜなら、特徴は庭が会う場所であるより、会わせる場所であるからである。『夢想』の庭も『愛の一ページ』の庭も、庭なくしては会うべくもない男女を結び、彼らを通して異なるグループを、異質の世界を接触させた。ムーレの庭は対立する社交界を合流させ、融合した。

この力はゾラの庭がマージナルな場所として存在することからきていると考えられる。庭は家とともに閉ざされた内部を作るのではなく、常に外部に開かれている、あるいは開かれようとする。そこは内部であると同時に外部でもあるゆえに内部の秩序・規範を延長しつつ、逸脱が、他の世界との接触が許される場所なのである。ゾラの場合にはすでに確認したようにそこには甦る春が象徴する原初的な決して尽きることのないエネルギーが回帰する。マージナルな場所としての庭はこのエネルギーに支えられ、一定の秩序を持つ複数の世界が接触し、融合し、新たな秩序の世界を生み出す場所である。

この庭の力を三幅対の配置という絶好のお膳立ての中でフォージャ神父は見事に利用し、ブラッサンを征服する。しかし彼は庭を捨て

る。2つの社交界をつないだシュヴィロット袋小路からムーレの庭へ入る扉は閉ざされ、庭はフォージャ神父の妹夫婦トルシュたちのものとなる。それはフォージャ神父にとって庭がブラッサン征服の手段でしかなかったからである。しかし、彼は征服したブラッサンも放棄する。彼は支配を維持する努力を払うことなく、町に現れた当時と同じような荒々しく無骨な支配者として恐れられる存在となり、結局焼死してしまうのである。そして帝政派となった町は新たな支配者、フォージャ神父を利用したルーゴン家の社交界によって支配されることになる。

すなわち、新たな秩序を生みだすべき庭の力が既存の帝政派の支配の確立のために利用されたにすぎないということである。融合し生成する庭の力は認めるがいまだ創り出すべき世界の姿は見えないという時点にこの作品があることをフォージャ神父の策略に視点をおいた3つの庭は語っているのかもしれない。この考察を念頭につぎにはムーレの庭の内部に視点を限定しその分析をつづけよう。

2. 1

ムーレの庭は第1章で述べたように物語の冒頭においては小市民的幸福に溢れた自足的な楽園である。そこに秘密の政治的使命を帯びたフォージャ神父が侵入し、庭の主人たるムーレ、そして庭の娘と言って過言ではない長女デジレを追い払う。その支配者となった神父はしかし使命を達成するや庭を見捨て、庭は強欲なトルシュ夫妻のものとなる。庭は姿を一変するがまもなくムーレによる放火によって破壊される。すなわち、庭をキーポイントとする征服の物語には対照的にひとつの庭の崩壊の物語が組み合わされているのである。では何が庭を崩壊させるのか。それは策略としての政治、教権としての宗教、私利私欲の追求としての経済、そして様々なすがたで人を襲う狂気である。

政治についてはすでに多言を要するものではないだろう。プラッサンの政治的征服という目的がフォージャ神父を庭に侵入させ、支配者とし、楽園の崩壊、庭の破壊に導く。注目すべきはこの侵入がキリスト教としての宗教の侵入でもあることである。まずこの侵入とそれが結果的にもたらす狂気について考察しよう。

2. 2. 1

ムーレの楽園は動物が住み、果樹や野菜が育つエデンの園に似た四分園であった。

神が造ったエデンの園、それを模倣する庭には中央に木か泉がある。生命の宗教的源である。しかしこの四分園の中央にある池には水がなかった。それはこの楽園を支えるものは宗教、すくなくともキリスト教ではなかったことを表している。ムーレ家は「家族そろってあまり信心深くはなく」(913)、ムーレは聖職者を軽蔑し、マルトはあまり教会へは行かず、子どもたちは神父をからかうのだった。この庭に下宿人のフォージャ神父が徐々に入りこみ、ついにはいつも「聖務日課書」を携えて歩き回るようになる(1000)。それだけではない、さらに彼は「噴水が流れるのを見たがり」泉水を修理させるのである(1029)。中央の水の出現、この小さなエピソードはフォージャ神父の支配力、すなわちキリスト教の神の力が庭に侵入し、地歩を固めたことを告げるものである。しかし、この時点ではいまだ庭にはムーレと娘のデジレの場所が残されている。

彼らを追いやり、ムーレ家の楽園の完全な崩壊、その物理的な破壊をもたらすのはマルトの狂気⁽⁵⁾である。その狂気は遺伝的なものであるが、引き金となるのはフォージャ神父が持ち込んだ宗教に他ならない。すなわちフォージャ神父によって宗教的慈善活動に誘い込まれ、その「思いのままになる」(974)存在となってしまったマルトは、急

激に信仰への傾斜を深めていく。神への信仰はフォージャ神父への崇拜と思慕に重なり、愛の高まりとそれに対する拒絶は情熱を苦悶に変え、そしてついにはこの宗教的狂熱が祖母から引き継いでいた狂気の種を激しい精神障害として発芽させるのである。さらにこの神経発作が結果的にムーレを庭から追放する。マルトの発作時の自傷行為がムーレの暴力行為によるものとされ、彼を狂人とみなす包囲網が町中にはりめぐらされた揚句に、ムーレは危険人物として精神病院に送り込まれるのである。この過程で本物の狂人となった彼は病院から逃亡し、自家に放火し、ムーレ家の庭を物理的にも消滅させる。

この宗教の侵入による楽園の崩壊という図式はムーレの庭の崩壊の物語をさらに大きな庭の物語に連結する。ここですでに示した悪魔という呼称がキーワードとなる。

2. 2. 2

フォージャ神父を下宿させることをムーレが告げた時、平穏な「気楽な」生活が失われる心配をしたのはマルトだった。その彼女をムーレはフォージャ神父が「悪魔ということはない」(904)と説き伏せた。しかし彼も不安を感じていたことは間違いない。ムーレはフォージャ神父を前にして「庭は閉ざされた楽園です。悪魔の誘惑など物ともしません」(932)と虚勢をはる。だが、確かにムーレ家にやってきたのは悪魔だったのである。黒い長衣姿で庭をわがもの顔に歩き回り、彼らから庭を奪い、政争の具に利用した神のしもべは彼らにとっては悪魔でしかない。この悪魔は閉ざされた楽園を開放し、また誘惑にも成功した。フォージャ神父は楽園の女主人マルトに宗教心を芽生えさせると同時に40歳にして「忘れられていた若さ」(1102)、再びの思春期を燃え上がらせるのである。⁽⁶⁾

すなわち、外出もせず繕いものに精を出すマルトの聖母慈善委員

会の活動の要への変身を知恵の目覚めととらえれば、このムーレがカラスに例える黒い悪魔は実は『創世記』のヘビなのである。『創世記』の神が創ったエデンの園ではイブがヘビに誘惑され知恵の実を食べる。善悪を知り自分たちが裸であることを知ったアダムとイブは神の怒りを受け楽園から追放される。この小説では、フォージャ神父＝楽園に侵入した悪魔＝ヘビ＝キリスト教によって楽園の女主人が知恵と性愛に目覚め、その結果、夫と子供たち全員が楽園を追放されるのである。すなわち、ムーレの庭の物語は『創世記』のエデンの園の物語の書き換えである。それは『創世記』の物語を通してのキリスト教批判とまではいかないにしても、一種のパロディであることは確かであろう。なぜなら、楽園に侵入し誘惑しそれを破壊するのは神、宗教であるからである。そしてそれはまたもうひとつの庭にまつわる創世の物語でもある。なぜなら破壊される楽園はキリスト教の神の登場を待たずにすでに存在した「原初の楽園」でなければならないからである。⁽⁷⁾

その楽園はデジレに象徴される。原初の楽園とはデジレの庭としてのムーレ家の庭である。

2. 2. 3

デジレとは物語冒頭では14歳のムーレ家の長女である。彼女は肉体的には年齢以上に发育しているが、精神的には5、6歳程度にとどまっている。この知的障害を持つ少女がその原初の楽園の象徴である。物語は他でもないこの「デジレが手をたたいた」(899)という文で開始し、次の場面で彼女は兄のセルジュが帰宅するとこう叫ぶ。「鳥が飛んでいってしまったの。青い鳥よ……」(900)彼女の鳥の1羽が鳥かごから逃げ出し、隣のラストワルの庭のナシの木に止まり、そして次に郡庁舎の木の中に隠れてしまったのである。ムーレの庭でデジレ

が飼っていた青い鳥がこれを挟む庭に飛び去っていく、これがフォージャ神父の侵入によって引き起こされるムーレの庭の崩壊の予兆でなくてなんであろう。しかし予兆に関心を持ち、これを悲しむのは彼女だけである。ゾラは物語の冒頭に原初の楽園の象徴である、しかし、無力なデジレの悲しみを置き、「征服」の物語の傍らにある「庭」の物語の存在をひそかに暗示し、かつ、その運命についても予告しているのである。

このデジレとその庭はつぎのように描かれている。まず彼女は毎日庭で鳥や昆虫と戯れ、木に登って「子豚」のように地面を這いずりまわって(991) 過ごす野生児として現れる。ついで、庭をこぎれいに保っていた父ムーレのブルジョア風の管理がフォージャ神父やマルトたちとの確執のなかで及ばなくなると、デジレ自身の庭空間を持つようになる。彼女は庭の一画のすべてを自分のものにし、「耕し、野菜を植え、水をまいた。大仕事が喜びだった。そして彼女は雌鶏を飼いたくなり、自分の野菜を食べさせて、母親のような愛情を注いで叱りつけた。彼女は動物に囲まれ、土にまみれて遊び、ひどく泥だらけになった」(1079-80)。教会帰りのマルトは土の匂いを激しく嫌悪し、半裸で髪を肩まで垂らしたデジレを「庭に追い払う」(1080)。

先に述べたようにムーレの庭は神の不在を除けば構成的にエデンの園に似ていた。このデジレの庭空間はこのムーレのエデンの園の下層を示していると言えよう。中央の池に噴水＝神が現れた庭をムーレの庭以後とするなら以前の庭である。すなわちそれは大地の恵みを直接受け取りながら動植物と人間が等しく一家族として暮らす原初のエデンの園である。デジレはこの神話時代の楽園の女主人、無知なる豊穡の女神といってもよいだろう。

ムーレ家がフォージャ神父の身内に支配され、マルトが宗教に没頭し、庭へのフォージャ神父の支配が広がるにつれ、ムーレがデジレの世界に接近する⁽⁸⁾のはムーレの楽園を支える下層がこのデジレの庭

であるがゆえである。そしてフォージャ神父が庭を「私の樂園」と呼び、ムーレの庭の崩壊、すなわちこれを支えるデジレの庭の消滅の運命が間近に迫ったとき、デジレを、すなわち原初の庭の力を守るべくムーレは独断で彼女を乳母のもとに預けることとなる。

われわれはムーレの庭を崩壊させたものとして政治、宗教、私利私欲の追求としての経済の3つをあげた。⁹⁾そしてキリスト教の侵入がムーレの庭、そしてデジレの庭を消滅させたことを確認した。すなわちムーレの庭の崩壊の物語に重なる「庭」の物語はこれで終わりはしない。崩壊の原因として経済が残っている。それはキリスト教の神の僕であるフォージャ神父の後塵を拝し、ムーレの庭に侵入する貪欲の神の徒、トルシュ夫婦である。

2. 3

トルシュ夫妻とはフォージャ神父の妹夫婦である。ブザンソンで失職したトルシュをフォージャ神父は聖母慈善委員会の事務員としてマルトに雇わせ、夫婦をムーレ家に下宿させる。

マルトが宗教に囚われ、精神の変調きたすにつれ、主人のムーレが権力を失うにつれ、彼らは地上的欲望の徒としての本性を現し、少しずつ、徐々に大胆に、ムーレ家の金銭を、家財を詐取し、ついには家そのものを乗っ取るのである。フォージャ神父がムーレ家を精神的に支配下に収めたとするなら、トルシュ夫妻は物質的にこれを略奪した。そしてトルシュ夫婦のムーレ家乗っ取りとその低級な宴の日々は、例えば『獲物の分け前』や『ボヌール・デ・ダーム百貨店』などが描く、この時代の大規模な手段を選ばぬ経済的利益の追求、あくなき物質的欲望の矮小化されたパロディである。

トルシュ夫妻が物欲に侵された19世紀後半の資本主義社会の象徴

であることは次の点にも読み取ることができる。フォージャ神父が支配権を放棄し、ムーレもデジレも追放されたムーレ家の庭の姿である。禁じられた楽園——フォージャ神父は彼らに庭に近づくことを許さなかった——の最後の主となった彼らは庭の大改造を決行する。

「ムーレがいなくなると、大改革、完全な修正計画を抱いて庭を侵略した。……畑は掘り返され、サラダ菜は堆肥にし、春に備えて牡丹、薔薇、百合、飛燕草や昼顔の種、カーネーションやゼラニウムの挿し木のために土を整えた」(1160-61)。野菜にかわって花が、つぎに自然にかわって、人工のまがい物が侵入する。彼らは花壇を囲み、庭の形を作っていた黄楊の木をすべて抜き、「自然の木を模した鋳物の枝で囲む」のである。あずまやは明るい緑色に塗り替えられ、噴水は石や貝殻などをセメントで固めて飾り付けた」(1161)。大地の恵みと美がつまじやかながらバランスをとっていたエデンの園は失われ、華美雑多な花で埋め尽くされた「今風の」観賞用の庭が現れるのである。

19世紀後半の産業技術の急激な進歩は作庭や園芸の技術にもおよんだ。トルシュの庭に見られるのはその「進歩」である。進歩の目からみれば昔ながらの黄楊の木は陰気でうとましく、鋳物の枝やセメントを使えば庭は明るく「風流」になる。トルシュたちは黄楊が庭を「墓場」(1161)のようにしている元凶としてこれを排除したのである。この「墓場」という言葉は重要である。なぜならこの言葉は次には庭が登場する小説最後の場面に現れ、逆に黄楊こそが庭に生命を与えた力の象徴であることを示すために使われるからである。テュレットの精神病院から逃亡し我が家に帰りついたムーレは庭に入る。「だが、彼にはもはや庭は見覚えがなかった。広々としてうつろでどんよりし、まさに墓場のようなだった。……とりわけ黄楊が、あの小高い緑の木の不在が、建物の生命溢れる一角が消えてしまったかのように彼の心を締め付けた」(1192)。ムーレは温室に切りそろえ束にされた黄楊の木

の残骸を見つける。それはまさに「地下納骨堂」(1193)の光景であった。墓場という言葉が時代の俗物トルシュたちがよしとする庭と豊穡なる大地の力に支えられていたムーレの楽園の対比を明確にしている。

ムーレの庭そのものの崩壊の物語はトルシュたちの改造によって完成する。しかしこの物語に重なる「庭」の物語にはつづきがある。それは狂人ムーレによる放火である。

ムーレは家が完全にフォージャ母子とトルシュ夫婦に乗っ取られたことを知るや眠り込んだ彼らの部屋の前に黄楊のかれ木の束を積み上げる⁽¹⁰⁾。庭の掠奪者、楽園の破壊者たちはこうしてかつての庭の象徴によって焼き殺されるのである。庭の物語は楽園の復讐で終わりを告げる。しかし、われわれがここに読み取るべきは楽園の力の尽き果てる前の最後の一撃ではない。それは根源的な大地の力の強さ、大きさであり、その不滅性への作者の信頼と期待であると言えよう。

3.

庭に焦点を合わせた分析はこの『ブラッサンの征服』という物語が、「ムーレの庭の崩壊」の物語でもあることを明らかにした。そして逃げ去る青い鳥で始まり、焼きつくす黄楊の枯れ木で終わるこの崩壊の物語には、エデン以前の原初の楽園が、政治の侵入により、宗教の侵入により、そして資本主義の侵入により失われていく過程が透かし彫りされているのであった。この過程はまた、庭がひとつの秩序の表現であるとともに、マージナルな場所という側面において新しい秩序の創造の可能性の象徴でもあること、そしてそうした生成を可能とする世界の根源的な力の常なる回帰を保証する場であることを示した。

ゾラが「ルーゴン・マッカール叢書」で描き尽くそうとした世界、

第二帝政下のフランス社会は政治と宗教と金を主要要素としている。ムーレの庭を崩壊させたのはまさにこの叢書の世界である。すなわち叢書の世界に庭は不可能である。第4巻で初めて庭が登場し、そしてそれが崩壊の物語であるとしたら、それは叢書の世界が庭が失われた世界であること、叢書が庭の喪失状態から始まっていることを確認するためであるといえよう。

研究の冒頭⁽¹¹⁾に記したように、近代資本主義社会以前において庭はそれぞれの時代の世界像の方舟であった。その秩序システムのすべてを凝縮した空間であった。そして庭は世界像を安定と理想的形態において現出させている、その限りににおいて庭は楽園であった。ムーレの庭——楽園はこうしたものとしての庭を失われたもの、この時代には不可能なものという認識のもとに提示したのである。

すなわち「ルーゴン・マッカール叢書」の世界はひとつの新しい秩序を持つ世界像を持たない。そこでは政治は策謀であり、宗教は迷妄であり、市民大衆は私利私欲に走る。時代の根幹をなす資本主義は利益追求のシステムであり、世界像を結ぶものではない。科学技術の進歩がもたらす変革への大いなる期待が空回りをしている。1867年の万博で商品の陳列会場より庭園部の方が大きかったことはこの世界像欠如の時代における無意識の代償行為であったのかもしれない。しかし、一方で「ルーゴン・マッカール叢書」にはその庭の喪失とその原因の明確な認識がある。それがこの叢書を単に第二帝政下社会の回顧的な描写にとどめず、未来を生みだしていくエネルギーの活動の場としての世界を描くものとしているのである。その未来とは後期4部作に現れる空想的社会主義世界であり、そこではもちろん「庭」が描かれるであろう⁽¹²⁾。

『プラッサンの征服』は「ルーゴン・マッカール叢書」から後期4部作にいたるゾラの世界の展開を導く重要なベクトルをわれわれに庭

の崩壊の物語を通してあきらかにするものなのである。（「下」に続く）

《使用テキスト》

Emile Zola, *Les Rougon-Macquart : histoire naturelle et sociale d'une famille sous le second Empire*, éd. Pléiade, tome1, 1960

*引用箇所については各所でテキストのページのみ示した。訳文については小田光雄訳（論創社）を参照し、適宜私訳を用いた。

《注》

1. 例えばゾラの庭、空間に関する主要研究 Jean-François Tonard, *Thématique et symbolique de l'espace clos dans le cycle des Rougons-Macquart d'Emile Zola*, Peter Lang, Frankfurt am Main, 1994 や Olivier Got, *Les Jardins de Zola*, L'Harmattan, Paris, 2002 でもこの作品は項目をたてての研究対象になってはいない。この小説の庭に的を絞った研究としては Aï Hayashida, « Les transformations du jardin de la Conquête de Plassans », dans “ Zola à l'oeuvre”, Strasbourg, PUS, 2003, pp. 176-185 が挙げられる。
2. もうひとつ、ムーレの叔父、マッカルが住むテュレット村の家の庭があり、この庭越しにムーレ夫婦の共通の祖母アデライドが閉じ込められている精神病院が見える。狂気を軸とした林田論文はこの庭をプラッサンのムーレの庭に対比し論じている。しかし草稿以外には上記以上この庭についての情報はなく、テキストを対象を限った場合庭そのものではなく“テュレットの庭の方”を論じることになるのでこの庭は本論ではとりあげない。
3. ナポレオン3世統治下オスマン知事がパリに造った公園は地方都市でも数多く模倣され、この時代の庭の典型となった。第二帝政下の庭園については Luisa Limido, *L'Art des jardins sous le second empire ; Jean-Pierre Barillet-Deschamps, 1824-1873*, Champ Vallon, Paris, 2002 が詳しい。
4. 山下誠「ゾラの庭（上）（文学の庭Ⅳ）」（『異文化』10、法政大学国際文化学部、2009年）複数の世界が交流するには扉が必要である。長く使われていなかった、あるいは使用禁止になっていた扉のテーマと庭のテーマは対になることが多い。この作品の他に「ルーゴン＝マッカル叢書」第1巻の『ルーゴン家の誕生』に始まり『獲物の分け前』『夢想』『愛の一ページ』を経て、ゾ

ラ最後の作品『真理』にまでそれは認められる。cf. Sylvie Collot, *Les Lieux du Désir*, Hachette, Paris, 1992

5. 小説中マルトの神経発作はムーレの暴力の結果とされ狂気とみなされることはない。しかし、彼女の激しい精神障がいには精神病院に閉じ込められている祖母からの遺伝に基づくものであり、ムーレの発症と同種のものであることは明白である。(cf.p.972) 狂気が庭の破壊の要因であることは、物語冒頭でその精神病院があるテュレット村からムーレが帰ってくることによって暗示されている。Cf. Hayashida, op.cité.
6. 信仰と性愛の結合を示す表現は随所に見られる。例えば p.990, p.1027, p.1101-1102, p.1176 など。この結びつきは次項にも深く関係するものである。
7. 『創世記』とムーレの庭との関連性の指摘自体は多くの研究者によってなされている。例えば Roy-Reverzy Éléonore, « *La passion religieuse : les Goncourt, Zola et la question anticléricale* », *Romantisme* n° 107, 2000-1, p.66,
8. 該当箇所例 p.1042, p.1081。デジレは『ブラッサンの征服』に続く叢書第5巻『ムーレ神父のあやまち』においてはセルジュ、アルビースにならぶ重要人物として登場し、その大地の豊穡の象徴としての性格を明確にする。
9. 2.1 で庭を崩壊させるものとしてあげた「狂気」は「宗教」によって引き起こされる。
10. 該当箇所：p.1199.
11. 山下誠「ゾラの庭（上）（文学の庭Ⅳ）」（『異文化』10、法政大学国際文化学部、2009年、131-132 ページ）
12. cf. Claire Meyrat-Vol, « Un nouvel Evangile : le rêve de la cité-jardin » dans "EIDOLON" N° 74, Bordeaux.P.U.B.. ここでも『ブラッサンの征服』の庭は無視されているが、Claire Meyrat-Vol はつぎのように述べている。« Et si tout a commencé dans la Faute de l'abbé Mouret par un jardin, tout finit, dans Travail ou plutôt tout continue avec un jardin. » p.281.